

配信日：2013年2月4日

史訪会 WEB ニュースレター 3

編集人：新地比呂志

E-mail: CQB02347@nifty.com(不明点はこちらへ)

● いよいよ2月になりました。私の勤務している職場(小学校)もインフルエンザが流行しつつあります。会員の皆様もお体にお気をつけください。

さてこのWEBニュースレターの活用ですが会員各位の研究会参加記や教育実践情報なども載せたいと考えています。少量の紀事でも結構ですので、どしどしご投稿ください。

● 史訪会第20回学術討論会の日程について(事務局長 斎藤尚文氏より)

平成25(2013)年度の学術討論会について決定いたしましたことを以下のとおりお知らせいたします。

今回は、中華民国政府の補助・後援を得て、台湾師範大学呉文星教授門下の研究者を招聘いたします。

正式なご案内、研究発表の募集につきましては6月頃に行います。ご参加、ご発表のご予定をお願いいたします。

日程 8月4日(日)
場所 兵庫県民会館(予定)
内容 ①台湾史関連分野
②中国史関連分野
③日本史関連分野 の3分野

● 目次

- | | |
|-------------------|-------|
| 1 台湾在外研究四方山話(その2) | 松田吉郎 |
| 2 わらわし隊について | 井上敏孝 |
| 3 討論の授業 | 新地比呂志 |

台湾在外研究四方山話（その2）

松田吉郎

私は2011年7月8日～10月8日まで台湾の政治大学台湾史研究所で在外研究を行っていた。研究テーマは「日本統治時代台湾の産業組合と戦後の信用合作社、農会」である。

明治44年（1911）に台北信用組合が成立してから、台湾で産業組合が本格的に萌芽した。大正2年（1913）に「台湾産業組合規則」が制定されてから台湾で急速に進展した。

産業組合は信用・購買・販売・利用の4部門からなる。中小業者のための金融・経済機関である。信用は今の信用金庫を思い浮かべてもらえばよく、中小企業、農民、商人向けの金融機関。購買、販売、利用は今の農協を思い受けてもらえばよく、農民のための肥料購入、米等農産物共同販売、農機具等の共同利用組合である。

この産業組合の発祥はイギリスのロバート・オーウェンからと言われ、その後ヨーロッパで発展したものである。その理念は大資本、大企業に対する中小業者のための金融・経済機関である。日本では平田東助等がドイツ・フランスでその制度を調べ、明治33年（1900）から産業組合が始まった。台湾では12年遅れて始まったのである。

日本統治期台湾の産業組合は都市部では信用組合、農村部では信用購買販売利用組合が成立し、大半は台湾人組合である。昭和15年（1940）時期、台湾人の半数近くが産業組合と関係し、資金量を比べると銀行の3分の1、郵便局の10倍ほどあり、まさしく台湾の中小産者のための金融・経済機関であった。

戦後、産業組合は都市部では信用部門の信用合作社、農村部では信用購買販売利用部門の農会に再編成され、継続した。

小生はこのテーマを選ぶきっかけは、1991年か92年頃、母校の大阪市立大学に非常勤講師として出向していた時に、授業が終わってから附属図書館の中で日本統治期台湾関係の資料を検索していた時の偶然からである。図書館の中の台湾関係資料の半数近くを小作慣行改善事業の資料が占めていた。同資料を読んで、論文を書いて、台湾の王世慶に見て戴いたところ、小作慣行改善事業、その下部組織の農事実行小団体は産業組合と関係するいいテーマだから是非やりなさいと励まされた。そこで、産業組合の資料を集め、研究することになった。1996年に5ヶ月台湾で在外研究していた間、その時のテーマは「日本統治時代台湾原住民教育史研究」で、毎日、中央図書館台湾分館で資料を収集していたが、その合間に同図書館で産業組合資料も集めた。ほぼ、上記2テーマの文献資料の収集を終え、帰国後、原住民教育と産業組合について論文を書いてきた。原住民教育については『台湾原住民の日本語教育』と『台湾原住民の社会的教化事業』でほぼ、書き終えた。産業組合について一冊の単行本にまとめるために今回台湾で研究を行っていた。その際、文献資料については主だったものはすでに収集済みであるから、聞き取り調査を行いたいと思った。

そこで実施した聞き取り調査は以下の通りである。木柵区農会、大台北銀行（旧稻江信用組合）、士林区農会、淡水信用合作社、淡水第一信用合作社、淡水区農会、桃園市農会、旗山鎮農会、旗

山信用合作社、馬公信用第一信用合作社、馬公第二信用合作社。アンダーラインを付してある所は聞き取り調査が成功し、付していないところは失敗であった。旗山鎮農会、旗山信用合作社は友人の曾茂源さんの紹介があったので成功したので、これを除くと、他のアンダーラインと付したところは全く誰も知り合いがないが成功したところである。アンダーラインを付していないところも誰も知り合いなく訪問して失敗したところである。この違いにはいろいろ原因はあろうが、聞き取り調査を進めている過程で、成功するか失敗するか、玄関に入ればすぐ分かる気が付いた。

玄関に受け付けがおれば成功し、いなければ失敗した。それは小生の訪問の仕方に問題があったのかもしれないが、恐らくは店の訪問者に対する姿勢が受付を置くかどうか示されていたということである。受付を置いているところは、外部の訪問者に対して開放的であり、経営もよい企業である。それに対して受付を置いていないところは外部の訪問者に対して閉鎖的で、経営もよくない企業である。

淡水区農会や馬公第一信用合作社では訪問者である小生をあちらこちらの部局にたらいまわしにし、結局は資料もない、お話しすることもないと、門前払い同様にした。これらの企業の競争相手の淡水第一信用合作社や馬公第二信用合作社に各々、淡水区農会や馬公第一信用合作社について聞いてみると経営があまりよくないとのことであった。

受付は企業の看板である。受付を置き、外部の訪問者に経営についてオープンに語る企業は経営がよく、逆に受付も置かず、外部の訪問者を門前払いする企業は経営が悪い、これが聞き取り調査で習得した成果である。

わらわし隊について

兵庫教育大学大学院博士研究生 井上敏孝

わらわし隊とは吉本興業と朝日新聞社が共同で、1938年以後戦地に派遣された兵士を慰問するために結成した演劇慰問団のことである。[2012年8月11日](#)～[9月2日](#)まで、[なんばグランド花月](#)では、吉本興業創業100周年記念公演として舞台『[吉本百年物語](#)』の8月公演『わらわし隊、大陸に行く』が上映されていたが、この舞台は同慰問団の中国大陸での活躍を描いた内容であった。

わらわし隊の計画が公表されたのは1938年1月であり、これは日中戦争が始まった約半年後のことである。そもそもわらわし隊は、「前線で奮戦する数多くの兵士たちを、漫才や落語といった演芸で慰問すること」を目的に朝日新聞社が計画し、同社の動きに吉本興業が協力するという形で具体化された。同年1月15日の『東京朝日新聞』には以下のような社告が掲載されたが、ここからも同慰

問団の特徴を窺うことが出来る。

輝く昭和十三年、皇威いよいよ東亜の洽き(略)本社が全国民より出征皇軍慰問のため寄託された資金は目下約三十二万円の巨額に達してゐるが(略) 今回右皇軍慰問資金の一部をもつて更に軍当局の援助を得て北支戦線および中支戦線に左の通り慰問映写班ならびに慰問演芸班を派遣することに決定

同社告を見ると、この時朝日新聞が募集して、国民が寄託した資金の総額が約32万円(現在の価値で10億円以上)の巨額に達していたこと、そして同慰問団の派遣資金の一部が、この資金で賄われていたことが分かる。同社告は同年最初の社告であり、その後も朝日新聞の紙面にはたびたびわらわし隊の動向を伝える記事が掲載された(1)。このことからわらわし隊は朝日新聞にとっても会社を挙げた一大企画であったことが窺えよう。

こうして国民から寄託された資金を手にした朝日新聞と当時興行会社として急成長を遂げていた吉本興業の協力によって戦時慰問団決定と派遣が実現した。実際、わらわし隊として派遣されたメンバーは当時抜群の人気を誇っていた横山エンタツ・花菱アチャコ・ミスワカナ等の吉本所属の芸人たちで組織された(2)。また、わらわし隊の名前は日本海軍及び陸軍航空隊が別名「荒鷲隊」と呼ばれていたことに由来するとされる。「荒鷲隊」という言葉は、戦時中の新聞で「海の荒鷲」「陸の荒鷲」という表現で頻繁に使われていたことから、当時庶民の間でも馴染みの深い言葉の1つであった。このことから派遣する側が「荒鷲隊」と「笑わしたい」をもじって、「わらわし隊」の名がつけられた(3)。

ちなみに同慰問団が派遣された地域は中国大陆に限らず、台湾や海南島を始め南洋地域にまで及んだ。特に台湾や海南島へのわらわし隊の派遣は台湾総督府によって要請されたものであった。その一例として1939年には台湾総督府からの委嘱で海南島にも派遣されている。1939年3月30日には東海道本線の大阪駅を出発した桜川末子・花子ら8人が慰問団として神戸港から船に乗り海南島へ向けて出発している(4)。

わらわし隊の台湾や海南島での活躍については今後別の機会に発表できればと考えている。

注

(1) 早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録—芸人たちが見た日中戦争—』2008年、p. 18

(2) 早坂隆『日本の戦時下ジョーク集 満州事変・日中戦争篇』2007年

(3) 前掲書(1)、p. 19

(4) 『週刊JR全駅・全車両基地02』朝日新聞出版、2012年、pp. 30-31

小学校の子どもたちは、非常に討論を好む。

最近の授業で取り扱った題材は、『「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ』（小学校 6 年国語 出典：サラダ記念日 作者：俵万智 ※光村図書小学校 6 年下に掲載）である。子どもたちは、登場人物の関係とその心情を類推しながらよく話し合えた。そしてまたほのぼのとした感覚も感じ取ることができたように思う。

それはさておき本年度社会科の授業で、実践したかったが、時間の関係で取り扱えなかった「討論の授業」が下記プランである。

農民の暮らしの変化を問う（太閤検地を通して）

1. 太閤検地とその歴史的意義

豊臣秀吉と言えば、すぐに「全国統一」「刀狩り」「太閤検地」「朝鮮出兵」というキーワードが浮かんでくる。もちろん小学校の教科書にも掲載されている重要事項である。

ところで「太閤検地」とは具体的には何をさすのであろうか。太閤検地とは、豊臣秀吉により、1582 年以後、秀吉の時代にその支配地で実施された生産力の調査であった。この太閤検地は全国的に統一された基準で実施された。そして自主申告の銭に換算した貫高制から、米の生産量を規定した石高制に変更された。太閤検地により、「一地一作人の原則」が確立された。すなわち中世的な複雑な土地所有の形態は解体され、中間搾取が一掃され、耕作人による土地所有が確定されたのである。そして年貢は土地所有者である耕作人に対して義務とされた。

太閤検地の意義は、荘園制が完全に消滅し、統一的な税制が確立されたことである。太閤検地によって、全国各地の石高が確定されたことは、その後江戸時代の幕藩体制の基礎となる石高制の基礎となった。一方、家臣団の城下町への集住政策や刀狩りとの連動で、身分制度の固定化につながった。

2. 討論につなげる発問例

子どもが熱中する授業を作るために極めて有効な書籍が有田和正氏の『調べる力・考える力を鍛えるワーク』（明治図書）である。調べ学習による情報の蓄積は、討論をするための基本的な条件である。このワークの「着色作業」と「問い」により、授業を進めるとよい。その際、教科書・資料集・百科事典・インターネットなどによって、調べ学習を展開するのである。

さらに、「①荘園制の崩壊と新しい税制の確立。②一地一作人（農民の自作農化）。③身分制度の固定化」が見える発問をする。私なら、農民の生活の変化を視点に、討論のテーマとして次のように発問する。

太閤検地により、農民のくらしは 豊かになったのだろうか。それとも貧しくなったのだろうか。

上記の授業外に現在構想しているのが、『参勤交代によって一番得をしたのは誰か』という授業である。今後も時間を見つけて教材開発をしたい。